

マムー

——雨ふり山のへび——

月野 一匠

一 仲間はずれ

雨ふり山のとっぺんを南へ少し下った林の中に、小さなお宮がありました。そのお宮の近くの岩かげが、子へび、マムーの生まれたお家です。

「ねえ、お母さん、あの建物はなあに？」

「あれは、人間たちの神さまのお家よ。」

「いま歩いているのはだあれ？」

冷たい地面を伝わって、だれかがお宮の正面へ歩いていく足音が聞こえてきます。

「あれはキツネよ。」

「キツネも神さまにお参りするの？」

「いいえ、キツネはね、人間が神さまにお供えした食べ物をもらいに来るのよ。」

小さなお宮は林の中のいい目印でしたから、お供え物が目当てでなくても、ウサギやイタチなど、ほかの動物たちも、よくやってきました。参道は、人間だけでなく、動物たちの通う道でもあったのです。

その日、マムーは、初めてひとりでお宮のすぐ脇にやってきました。笹やぶの中からじっと参道を見ていると、一ぴきのネズミが坂をいきおいよく走りあがってきます。その後ろを、もう二ひきのネズミが追ってきます。

「二ばぁーん。」

先頭を走ってきたネズミが、お宮のとびらの前で、後ろを振り向いて、叫びました。

「二ばぁーん。」

と、つぎに走り着いたネズミが、叫びました。

「三ばぁーん。」

と、最後にゴールインしたネズミが、いきました。

三ぴきのネズミは、かけっこをしていたのです。

「ハア、ハア。ねえ、こんどはジャンケン・ゲームしよう。」

三びきは、休むひまをおしんで、さっそくジャンケンを始めました。

「ジャン・ケン・チュー」

「ジャン・チュー・ケン」

「チュー・ケン・ポン」

なんだか、とっても楽しそうです。ママーは、思わず、

「ねえ、ボクも仲間にいーれて。」

と、ネズミたちの前へとび出しました。

ところが、

「わあ、逃げろ。」

ネズミたちは、とたんに汗を散らして、いちもくさんに坂を走り下っていつてしまいました。

「急にとびだしたからって、そんなにびっくりしなくてもいいのに。」

ママーは、ネズミたちが走り去った方向を見て、不満そうにいいました。

ママーは、また笹やぶの中に、もぐりました。

こんどは、三びきのウサギたちが坂をかけ上ってきました。

「やつぱり、ふもとよりこっちの方が、木が多いね。」

「そうさ、かくれんぼには、ここが一番さ。」

（えっ、かくれんぼだって？）

ウサギたちの会話を聞いて、ママーはまたじっとしていられなくなりました。ママーもかくれんぼが大好きだったからです。

「じゃ、鬼を決めよう。」

目の前でウサギたちが立ち上がって、ジャンケンを始めました。

「ジャン・ケン・ピョン」

「ジャン・ピョン・ケン」

「ピョン・ケン・ポン」

ママーは、もうたまりません。でも、いきなりとび出したのでは相手がびつくりすることがわかりましたから

「こんにちは。」

と、おじぎをしながら、そうっとウサギたちの前へ進み出ました。

ところが、

「わあ、逃げろ。」

ウサギたちは、ピョンとジャンプすると、反対側の笹やぶの中へとびこんでしまいました。ガサガサと音だけを残して――遠くへ走り去っていくようです。

「へんなの。ちゃんと頼んで入れてもらおうとしたのに。」

ママーは、不満顔です。

マムーは、また笹やぶにもぐりました。

しばらくすると、どこかで聞いたことのある足音です。

山頂の方から、おおがらなキツネが一ぴきおりてきました。

キツネは、お宮の正面のとびらにちらっと細い目をやると、フワアーツと、大きなあくびをしました。

だれともいっしょじゃないようだし、退屈そうです。マムーは、キツネとなら遊んでもらえる気がしました。

「キツネのおじさん、いっしょに遊ぼう。」

マムーは、道に出て、キツネの正面に向かい合いました。

キツネは、大きな体に似合わず、ギクツとしました。

「あいにくだが、おことわりだね。」

キツネはめいわくそうにそういうと、わざわざマムーをさけて、道から斜め横の笹やぶの中へジャンプし、そこからまた斜めにジャンプして、マムーの真後ろの参道内へ戻りました。

「ふん、なにさ。」

マムーは、キツネの後ろ姿を見送りながら、赤いベロを出して、「イー」を、しました。

「ねえ、お母さん。」

マムーはお家へ帰ると、昼間あったことの一部始終を、お母さんに話しました。

マムーが不満を顔に表しながらする話を聞き終わったお母さんは、笑いながら、

「マムー、私たちは、この山で一番強い動物なのよ。私たちの歯にかまれたら、おとなのキツネだってしびれてしまうわ。手足はないけれど、私たちの毒は、だれにも負けない武器なのよ。」

「えっ、ボクってそんなすごい毒をもってるの？」

そうか——ネズミやウサギやキツネまでが、自分にびっくりした本当のわけは——そうだったんだ。

その夜、マムーは夢を見ました。

雨ふり山の頂上に、ネズミやイタチ、ウサギ、リス、キツネたちが集まり、みんなが輪になって歌を歌っていました。

「雨ふり山に雨がふる。」

雨があがって日がさせば、

お山の上に虹が出る。
虹を目当てにみなおいで。
雨ふり山のとっぺんは、
おしあい、へしあい、
草ぼうぼう。」

それは、いつもお母さんが歌ってくれる子守歌に同じでした。

「ねえ、ボクも仲間に入れて。」

「ママーは、輪の外から、みんなに声をかけました。が、だれも振り向いてはくれません。」

「ねえ、ボクも仲間に入れてよ。」

「とつぜん、ママーは輪のまん中にいました。」

「ねえ、ボクも仲間に入れてったら。」

すると、ママーに気がついたまわりの動物たちは、いっせいに、

「わあ、毒へびだ。」

と、叫んで、

「逃げろ、逃げろ。」

と、四方八方へ、散り散りに走り去ってしまいました。

すやすや眠るママーの目から、涙がひとつぶこぼれ落ちるのを見たお母

さんは、

「ママー、あなたは本当に優しく生まれたわ。」

と、語りかけて、ママーの涙つぶを、舌でそっとぬぐってあげました。

二 消えた帽子

次の日、ママーは再び、お宮の脇の、笹やぶの中にいました。たとえ、いっしょに遊ぶことはできなくても、知らないお友だちの姿を見ることは、楽しみだったからです。

お昼すぎ、ふもとの方から、元気な声が聞こえてきました。人間の子どもたちです。

「いいか、あそこまで競走だ。」

「どうやら、この参道では、お宮が見えると、だれもが自然とかけっこしたくなるようです。」

「ようい、ドン。」

という、かけ声とともに、

パタ、ペタ

パタ、ペタ

パタ、ペタ

という、三組の平たい足音が、地面を伝わってきました。

「変なリズム。」

けものたちの走りが、はずむような軽やかさなのに比べて、いま近づいてくる足音は、まるで地面をたたくような乱暴な走りです。

「わっ、二本足で走ってる。危なっかしいな。」

どうりで、変なリズムのはずです。人間の子どもたちは、木みたいに立つたまま、坂を駆け上ってきました。

中くらいの男の子が、先頭をきってお宮の正面にタッチしました。すぐが続いて、大きな子がゴールしました。少し遅れて、小さな子がたどり着きました。

三人の男の子たちの名前は、年の順に、大介、仲夫、正太といいました。

「ボクが一番だよ。」

と、年のまん中の仲夫が、得意げに、一番あとから来た年少の正太にいきました。

すると、

「ちがうよ、オレが一番だ。」

と、年長の大介が、とっぜん胸をはりました。

「うそだ。」

「うそじゃない。道がせまいから追いぬけなかっただけだ。」

「そんなの、ずるい。」

「ずるくない！」

あれあれ。順位ははっきりしていたはずなのに、大介の言いがかりで、いまにもケンカになりそうです。

小さな正太は、どっちについていいかわからず、ただじっと成り行きを見守っています。

「ずるいよ。」

「ずるくない。」

「ずるいぞ、エイッ。」

くやしさままっつて、仲夫がとうとう右手を振り上げました。こぶしが、大介の胸をたたきます。

「やったな。」

こうなると、どちらが正しいかではなく、どちらが強いからです。

大介はいきなり逆に、仲夫の帽子をうばいとって、エイッと遠くへ投げてしまいました。

「おまえが先にやったんだからな。」

悪いのはおまえだといわんばかりに、大介は、自分のしたことを正当化してしまいました。

仲夫は、ベソを書きながら、自分の帽子のゆくえを見やりました。

お父さんが誕生日に買ってくれた、かっこいい帽子です。気に入って、遊ぶときはいつでもかぶっている黄色い帽子です。

どこへ行ったのでしょうか。あればすぐにわかる目立つ色なのですが――近くの笹っぱの上には――ありません。

遠くの笹っぱの上にも――ありません。

木の枝の上に引っかけたって――いません。

もう一度、あるはずの方向を、ぐるーっと、ていねいに見回しましたが――見つかりません。

となると、帽子はきつと笹っぱの下――笹やぶの中へ入り込んでしまつたにちがいありません。

仲夫は、しかたなく、やぶに分け入って、両手で笹っぱをかき分け始めました。

「たぶん、その辺にあるはずだから、よく探せ。」

と、参道から、大介が無責任に叫びます。

笹やぶに入ればすぐに見つかると思つたのですが、一度に探せるのは、せいぜい両手の範囲です。

けんめいに探しても、帽子は出てきません。

「これでよく探せ。」

大介が、どこで見つけたのか、木の枝の棒を二本、二人に向かって投げました。

仲夫と正太は、その棒で、笹っぱを左右にバサバサとかき分けます。手でやるよりも一度にずっと広く探せるようになりましたが、かんじんの帽子はいつこうに見つかりません。

時間だけがいたずらに過ぎ去っていく感じですよ。

「よし、どいてろ。オレが探してやる。」

いつのまにか、大介がもっと太い棒をもって、笹やぶの中に入ってきていました。

「エイ、エイ。」

大介は、棒を力いっぱい振り回して、笹をなぎたおします。そのたびに、ちぎれた笹の葉が、あたりに舞いました。

林の下の地面が、どんどん荒らされていく感じですが。

大介の後ろ姿は、たのもしく見えました。

やれやれ、もう安心です。場所だって、投げた本人が、一番よく知っているはずですよ。仲夫と正太は、後ろで待つことにしました。

：：三分、四分、五分。待つときの時間は長いものです。

「まだかなあ。」

そのうちに、大介が手を止めて、フーと、肩で息をしました。

「あった？」

と、仲夫が、すかさず期待を込めてたずねました。大介の額には、汗がにじんでいます。

「ぜったい、この辺に落ちたんだ、おまえの帽子。：：どうして見つからないんだろ。」

大介の声は、あせりから、力を失いかけています。

「あの帽子：：：」

「わかってる！」

大介はまたはげしく棒を振り始めましたが、息がハアハアして、棒より自分の体の方が揺れています。

「だれかが、かくしたのかなあ。」

と、正太が、いうともなくいいました。

「だれが？ ほかにだれもないぞ、ここには。」

と、仲夫が、いい返しました。

「ゆうれいとか：：：」

(ゆうれい？)

正太の答えにギクツとしたのは、大介です。

「バカ！」

と、どなりつけましたが、顔はいまにも泣き出しそうな表情です。

「ゆうれいなんて、いるわけないだろ。」

仲夫が正太に、さとすようにいいました。

「神さまに頼んでみようか。」

正太が、別のことをいい出しました。

「神さま？」

なるほど、目の前はお宮です。いい考えかもしれませんが、これだけ自分たちで探しても見つからないのですから、神さまにお願いするのも、一つの方法です。

それに——いまは、大介より神さまの方が、ずっと頼りがいがあるように思えます。

「そうだな、神さまにお願いしてみよう。」

仲夫と正太は、お宮に歩み寄りました。大介も、神妙になって加わりま
す。

仲夫、正太、大介の三人は、並んで、お宮に向かって、

「神さま、どうか、

ぼくの

仲ちゃんの

仲夫の

帽子が、すぐに見つかりますように。」

と、となえて、おじぎをしました。

そして、帽子が消えてしまった方角の笹やぶに、顔を向けました。

すると、どうでしょう。

自分たちが探していた場所よりずっと手前の、少し右へはずれた笹っぱ
の上に、仲夫の黄色い帽が、スーと現れました。

「あつた！」

仲夫がうれしそうにかけ寄ろうとすると、帽子も笹っぱの上を仲夫の方
へ向かって、ササーと、すべり寄ってきます。

仲夫は、帽子を手に取ると、すぐにそれが自分のものであることを、た
しかめました。お父さんが誕生日に買ってくれた、自分の愛用の帽子にち
がいません。

「あつたよ。」

と、仲夫は振り向いて、大介と正太に、自分の帽子をかぶって見せました。

「さすが、神さまだなあ。」

と、大介が感心しました。おとなたちがお参りに来るのも、これなら当然
です。

三人は、すっかり神さまのファンになって、

「ありがとうございます。」

と、お宮に向かってお礼をいいました。

「よし、それじゃあ帰るぞ。」

大介が、何ごともなかったように、元のガキ大将にもどって、いせいよ
く号令をかけました。

三人の男の子たちは、そろって参道を、ふもとへおりていきました。

お宮のそばの笹やぶの中から、

「ウフフ、ボクも帰る。」

というマムーの声がしました。

「お母さん、ボクは、きょう、いいことしたんだよ。人間の帽子を探して、運んであげたんだよ。」

家に帰ったママーは、さっそくお母さんにそう報告しました。

三 ちいちゃん

木もれ日が落ちる静かな参道です。

きょうも、ママーは笹やぶの下にいました。

「ああ、気持ちいい風。」

聞こえてきたかわいい声は、人間の女の子です。

「ほんと、いい風ね。」

後ろから、お母さんもいっしょです。

「あ、お宮よ、お母さん。」

「そうね、頂上はもうすぐだから、ちよつとあそこで休んでいきましょか。ちいちゃんには、初めての山登りだから、つかれたでしょ。」

「ううん、ぜんぜん。ほら。」

女の子は、わざと足を早めて、小走りしてみせました。

軽く息を切らしながら、ちいちゃんが、ママーの目の前を通り過ぎました。

（ずいぶん色の白い子だな、ちいちゃんて。）

女の子の横顔を見て、ママーはそう感じました。

続いて、お母さんがやってきました。

（お母さんも、色白なのかな？）

いっしょ。

たしかに、お母さんも色白ではありませんでした。でも、ちいちゃんの顔色の白さは、別格です。

お宮の前で向き合った二人の顔色を見比べると、それがよくわかりました。

ちいちゃんは、黒い髪に赤いリボンを結んでいましたが、透きとおるような顔色のせいで、黒い髪は、ぬれたようにいっそう黒く、赤いリボンは、燃えるようにいっそう赤く見えました。

「せっかくだから、お参りしていきましょうね。」

「ええ。」

母と子二人は、並んで、お宮に手を合わせました。

「わたしのお願ひ、神さまきいてくれるといいな。」

「どんなお願ひ？」

「もつともつと元氣になつて、お外でみんなといっしょに遊びたいの。」

「だいじようぶ、きつと元氣になれるわ。」

お母さんは、もう一度、そつとお宮に手を合わせました。

ちいちゃんは、いまは元氣そうに見えるけど、本当は病氣がちで、めつたに外で、お友だちといっしょに遊ぶことができないのでした。

(ちいちゃんも、お友だちといっしょに遊びたいんだ。)

ママーは、急にちいちゃんに、親しみをおぼえました。

ちいちゃんとお母さんは、それからまた、雨ふり山の頂上めざして上つていきました。

雨ふり山のとつぺんは、林が開けてぼっかり空いた、まあるい広場です。

広場に通じる林間の道を、ちいちゃんとお母さんが上つてきました。

「わあ、明るい。」

とつぺんの広場に一番乗りしたちいちゃんの頭上には、抜けるような青空だけがありました。光がいつぱいの、草の広場です。

「お母さんも久しぶりだわ。」

広場のまん中で、お母さんが、うれしそうに両手を伸ばして、胸いつぱいに深呼吸しました。

「わたし、おなかすいちちゃつた。お母さんは？」

「ベッコペコ。」

ちいちゃんとお母さんは、背負つてきたリュックサックをおろすと、草の濃いところをえらんで、向かい合つて腰をおろしました。

ちいちゃんは、さつそくおにぎりをおぼります。

「おいしい。」

ちいちゃんは、口のまわりにご飯つぶをつけながら、一個めを平らげました。

お母さんも、おいしそうに、おにぎりをほおぼります。

「お茶はどう？」

水筒の中は、暖かいほうじ茶です。

「おいしいね。」

ゴクンと飲んで、ちいちゃんは、二個めのおにぎりを手に取りました。

ちいちゃんが、こんなに食欲をみせるのは、めつたにないことでした。

お母さんがリュックサックの中に入れてくれた三つのおにぎりを、ちいちゃんは、みごとに平らげてしまいました。

「よく食べたわね。おなかだいじょうぶ？」

お母さんは、うれしそうに、ちいちゃんの食べすぎを心配しました。

ちいちゃんは、立ち上がって、草の上で、元気に歌を歌い始めました。いつも、お外でお友だちが歌っている歌です。

「雨ふり山に日が昇る。

お日さま照ればポッカポカ。

お山の上は広場だよ。

広場めざしてみなおいで。

雨ふり山のとっぺんは、

おしあい、へしあい、

草ぼうぼう。」

歌い終わったちいちゃんは、林の下に一輪の赤い花を見つけました。

「あ、お母さん、あそこにきれいなお花。」

「あら、ほんとう。ふしぎね、一本だけ。つんでいく？」

「すてきだけど……でも、せっかく咲いているのにかわいそう。そつとしいてあげたいわ。」

「そうね、それが一番ね。じゃ、お花にもさよならして、そろそろ帰りましょ。」

ちいちゃんとお母さんは、すっかり軽くなったリュックサックを背負うと、もと来た道をゆっくり下っていきました。

急にさびしくなった雨ふり山のとっぺんに、マムーだけが残りました。

お宮のわきにいたマムーは、頂上へ先回りして、ちいちゃんたち二人を待っていたのです。

(ちいちゃんて優しいんだな。)

赤い花はちいちゃんにプレゼントしたくて、マムーが途中でつんできたものでしたが、残念ながら、ちいちゃんの手にはわたりませんでした。

「ごめんよ、せっかく咲いていたのに。」

マムーは、赤いお花に、あやまりました。

「でも、むだにはしないからね。」

ちいちゃんたちのおにぎりを見ておなかがすいていたマムーは、そういつて、赤いお花を、パクツと飲み込みました。

四 空へのあこがれ

マムーは、雨ふり山のとっぺんが好きになりました。てっぺん広場には、ほかのどこにもない広い大空があります。

林の下の笹っぱごしに見る空は、まだらもよりの空です。お宮の参道から見る空は、細長い空です。それに比べて、てっぺん広場から見る空の、なんと広々と大きいことでしょう。

地上だけが世界のすべてだと思っていたのに、雨ふり山のとっぺんには、大空というもう一つの世界があったのです。

マムーは、雨ふり山のとっぺんで遊ぶことが多くなりました。

草の上に寝そべって、頭上を見上げると、大空はもう自分ひとりのものです。

(ボクは、いま、この山で、空に一番近いところにいるんだ。) てっぺんならではの満足感です。

大空をひとりじめしているうちに、マムーはふと、空を飛んでみたいという思いにかられました。

(空：：飛んでみたいな。)

マムーは、自分が大空を飛んでいる姿を想像しました。フワリ、フワリ——まるで、風になった気分です。

「どうやったら、本当に空を飛べるんだろう。」

マムーは、現実にもどって、しんけんを考え始めました。

ヘビが空を飛べるわけがない——と、初めから決めつけてしまうのは、ヘビ以外の動物です。ヘビは、自分の願望に対して、無理だとかできないとか、否定的に考えることはしません。むしろ逆に、夢みたいな願望であっても、「できるもの」と思いこんでしまうのが、習性です。

だからまた、多くの場合、その願望をいちずに追い求めることになります。人間たちはよく「ヘビは執念深い」といいますが、誤解です。ヘビだって、もし初めから「できそうもない」と思ったら、むだな努力はしないでしょう。しかし、「できる」と思いこんでしまう習性だから、どうしてもいっしょうけんめいになるのです。

ヘビの習性は、かわいそうなほどに、楽天的なのです。でも——かわいそうとはいえ、ヘビが冷静に「できるかどうか」なんて考える能力を与えられていたら、かえって残酷かもしれませぬ。翼はおろか、手も足もないヘビにとって、初めからできると思えることは、あまりにも限られているからです。

さいわいヘビは、楽天的に生まれついています。「できる」と思ってやる

から、じっさいうまくいくことが多いのです。

マムーの頭の中にも、「できない」なんていう考えはありません。まして、マムーは子どもです。

どうやったたら空を飛べるのか——マムーは、しんけんに考え始めました。へビは胴をくねくねさせると前へ進みます。まっすぐ前へ進むには、頭を軽く持ち上げ、正面を見すえて胴を左右にくねくねさせます。左へ行きなければ、顔を左に向けて胴をくねくねします。右へ行くときは、顔を右に向けてくねくねするのです。行きたい方向へ顔を向ければ、その方向へ進む、ということは一——

「そうか、真上に向かって胴をくねくねすればいいんだ。」
と、早くも、マムーの頭の中にアイデアがひらめきました。

顔を真上に向けて胴をくねくねしさえすれば、体は空に向かって進むにちがいありません。

空を飛ぶなんて、簡単なことだったので。今までやってみなかつただけのことです。

マムーは、さっそく頭をもちあげ、めざす真上の空を両目でしっかり見つめて、自分の胴体を思いっきりくねくねさせました。

すると、体が伸び上がって、まっすぐ立ち上がる感じになりました。しかし、次の瞬間、マムーの体は、たちまちバランスを失ってしまいました。

「おっとっとと。」

マムーは、しっぽの先で自分の体重をささえながら、あわてて全身の力を抜いて、地面の上にとぐろを巻きました。

「ふうー。」

失敗です。

地面の上なら、思いの方向へ自由自在に進めるのに、真上には、くねくねが役に立ちません。

(なぜだろう。)

マムーは、じっと考えます。

へビは真上には進めないのでしょうか。いいえ、そんなはずはありません。マムーは木のぼりが得意です。細い木なら、幹に巻きついてこずえのてっぺんまでスルスルとのぼることがができます。

「そうか、高い木を探せばいいんだ。」

マムーは、天まで届くような高い木があれば空に行けるぞ、と思いました。

でも、雨ふり山にはそんな高い木はありません。てっぺん広場のまわりの木々は、高いものでも、じっさいにのぼってみると、空はいぜん頭上は

るかにありました。

（高い木がないとすると、それに代わるものが必要だ。どこかに長い棒でもあるといいんだけどな。）

と、思ったマムーは、さっき自分が真上に向かってくねくねを試みたとき、自分の体が棒みたいになったことを思い出しました。

「そうだ、いい方法がある。」

マムーは、思わずにっこりしました。棒など使わなくてもいいのです。その代わり、友だちへびの協力を得なければなりません。

マムーは、最近友だちになったばかりのブルーに声をかけることにしました。ブルーは、マムーより身長の高い青へびの子どもです。

「ねえ、ブルー。空の上まで行く方法を考えたんだけど、ぼくといっしょに行ってみないかい。」

「え、ほんとう？」

マムーは、ブルーに、自分の考えついたアイディアを説明します。

「いいかい、よく聞いてね。はじめ、ぼくが地面にさっと立ち上がって棒みたいになるから、そしたら君はすぐにぼくの体に巻きついて伝いあがり、ぼくの頭の上に立ち上がってね。君がぼくの頭の上に立ち上がったら、こんどはぼくがすぐに君の体に巻きついて伝いあがり、君の頭の上で立ち上がるから。」

「そしたら、こんどはぼくがまた君の体に巻きついて伝いあがり、君の頭の上に立ち上がる。そしたら、次に君がまたぼくの体に巻きついて伝いあがり、ぼくの頭の上で立ち上がる、というわけ？」

「そのとおり。」

マムーの考えたこの方法なら、長い棒など必要ありません。ふたりで力を合わせて、たがいに相手の体を利用して次々に上へのぼっていけば、空がどんなに高くたって、のぼりきれははずです。

「この方法で空の上まで行って、雲に乗るんだよ。すごいだろ？」

「そんな簡単な方法で、ほんとうに空に行けるのかな。」

ブルーは、うたぐっています。

「行けるさ、やってみようよ。」

と、マムーは、ブルーを説得しました。

マムーは、ブルーを誘って、てっぺん広場にやってきました。

広場にはだれも来ておらず、静かです。

「じゃ、さっそくやってみようよ。」

と、ブルーがいました。

「待って、ブルー。上をごらんよ。」

ブルーが上空を見上げると、青空が広がっています。

マムーは、冷静にいました。

「今のぼっていても乗る雲がないから、あの雲が来るのを待つんだ。」

西の方から、白いわた雲がゆっくり流れてきます。

「わかった。そうしよう。」

せっかく空の上にたどりついても、乗る雲がなければ意味がありませんから、ふたりは、てっぺん広場の真ん中に並んで、わた雲が真上にやってくるのを、しんぼうよく待ち続けました。

その間、マムーは、雲をじつとながめながら、自分たちがその上に乗ってフワリフワリと大空を旅する姿を、夢見心地で想像していました。

やがて、ついにその白いわた雲が、てっぺん広場のふたりの真上にやってきました。

マムーとブルーは、むくと頭を持ち上げました。いよいよ待ちに待った、大空への旅立ちの瞬間がやってきたのです。

「用意はいいね、ブルー。」

「うん。」

「では、作戦開始！」

あらかじめ打ち合わせておいたとおり、まずマムーが、

「えいっ」

と、真上に向かって胴をくねくねさせ、地面の上に自分の体を直立させました。

マムーの体が棒のようになったのを見て、次にブルーが、

「えいっ」

と叫んで、マムーの体に巻きつき、スルスルと伝いあがって、マムーの頭の上に立ち上がりました。

「いい調子。」

こんどは、マムーが自分の頭の上のブルーの体に巻きついて、さらにその上に伝いあがる番です。

ところが、

「えいっ」

と、マムーがしっぽでジャンプしたとたん、マムーの頭の上に乗っていたブルーの体が、マムーのジャンプとすれ違うように、ストーンと地面に落ちました。

跳び上がったものの、マムーの体も、巻きつくものを失って、そのまま

ブルーの体の上に、重なるように落ちました。

「いたたたた。」

「だいじょうぶ？」

「ママーは、ブルーの体を気づかいながら、スルリと自分の体を離しました。」

「ごめんよ、ブルー。ぼくのジャンプがわるかったんだ。もう一ぺんやってみよう。」

「えっ、またやるの？」

「ブルーは気のりしませんが、ママーは自分のジャンプが失敗の原因だと思っ
ていますから、」

「こんどは、きつとうまくやるから。」

と、説得して、ブルーの体を起こしました。

「ママーとブルーは、もう一度、ママーのアイディアを試みるために、さ
つきと同じように、」

「えいっ」

と、作戦を開始しました。

「ママーが直立すると、ブルーがいきおいよくママーの体を伝い上がって、
ママーの頭の上に立ち上がりました。注意しなければならぬのは、次で
す。」

「ママーは、細心の注意を払いながら、」

「えいっ」

と、ジャンプして、自分の頭の上のブルーの体に巻きつこうとしましたが、
意外にも、またもやブルーの体がストンと落ち、ジャンプしたママーと空
中ですれ違いました。

「いたたたた。」

結果は、さつきとまったく同じです。

二度までママーの下敷きになったブルーが、痛そうに体をよじって、胴
のあちこちをなめています。

「ごめんよ、ブルー。この方法は、もっとジャンプの方法を練習しないと
ね。」

「ブルーが、あきれはてて、いいました。」

「ママー、これは練習とかの問題じゃないと思うよ。」

「真上を見上げると、無情にも、白いわた雲は、もうてっぺん広場の上を
過ぎていました。」

「ブルーは、もうこりこりという、うらめしそうな顔で、雨ふり山のとてっ
ぺんを下りていきました。」

「ごめんよ、ブルー。」

マムーは、ブルーのあとを追いながら、今日は失敗だったけど、きっとほかにできる方法があるはずだ、と考えていました。

五 雨乞い

お日さまの光をいっぱい浴びようと、いつもは天を仰いでいる木々たちに、元気がありません。葉っぱたちは、みな、うなだれています。

日照りのせいです。雨ふり山に雨が降らなくなってから、もう一カ月にあります。

木々の葉っぱがうなだれた分だけ、地上に降り注ぐ木もれ日の量も多くなって、マムーの目にも辺りがまぶしく感じられるようになりました。

まぶしさだけではありません。いつもなら地面の上をすべるように前へ進むことができるのに、土が乾いてしまつて、動くとおなかがすれてしまいます。

困るのは、笹っぱの裏に朝つゆができなくなったことです。ふだんは、のどが渴いたら笹っぱの裏に残る朝つゆを舌でなめて飲むのですが、今はそれができません。山のとっぺん広場をはさんでお宮と反対側にある北斜面へぐるりと回りこんで、くぼ地にしみ出るわずかな水を飲むのです。もともと草のつゆだけでは足りないキツネやタヌキ、イタチなどの大きな動物たちは、水を求めて下の沢のほうへ下りています。

お日さまが高く上る日中は、動物たちは動くのをやめて、体を休めることが多くなりました。かんかん照りの中で、雨ふり山の全体が、じっと息を潜めているような毎日です。

「ねえ、お母さん。雨はいつになったら降るの？」

マムーは、たずねました。

「お山の上に雨雲が来てくれたらね。」

「じゃあ、雨雲はいつ来てくれるの？」

「いつかしらね。早いといいわね。」

お母さんの答えも、期待が変わってしまいました。

(このまま日照りが続いたら、どうなるんだろう?)

マムーにとっては初めてのことで、お母さんは前にも経験したことがあるようです。

「だいじょうぶよ。今に人間が雨を降らせてくれるから。」
「え、人間が？」

次の日、朝早く、おおぜいの村人たちがふもとから参道を上ってきました。十人、いや二十人はいると思われます。細い道を一列に並んで上ってくる村人たちの足もととは、土ぼこりが舞い上がって、ズボンのすそやはきものが、すっかり茶色に染まっています。

参道の脇の笹っぱの中にいるマムーの目の前にも、土ぼこりが舞ってきました。

「うわあ、たまんないな。」

マムーは、思わず目をつむり、息を止めました。一度にこんなにおおぜいの人間がやってきて、何をしようというのでしょうか。

村人たちは、お宮に着くと、正面のとびらを開け、大切に持ってきたお酒とお米と塩を、お供えしました。そして、お宮の前の狭い空き地に身を寄せ合うよう並ぶと、いっせいに祈りを始めました。

「神さま、どうか雨をお降らせください。」

人間も、日照りには困り果てていたのです。

それにしても——お母さんは人間が雨を降らせてくれるといていたのに、人間たちは、神さまに雨を降らせてもらうつもりのようです。

「なあんだ。だったら人間に頼らないで、初めからぼくたちが神さまにお参りすれば早いのに。」

と、マムーは思いました。神さまは、人間のお願いだけ聞いて、動物たちのお願いは聞いてくれない、ということはないはずです。

ところが、村人たちは、お参りをすませてもすぐには帰らずに、さらに山のでっぺんをめざして、細い道を上り始めました。どうやら人間は、自分たちでも何かをするようです。

マムーは、先回りして、様子を見守ることにしました。

村人たちは、雨ふり山のでっぺんに着くと、しおれて枯れた草をカマで刈って、広場のまん中にこんもりと積み上げました。

枯れ草の山は、人間のおとなのこしくらいの高さです。村人たちは、それを遠巻きにして囲みました。

何をするんだろうと、マムーが思ったときです。パチパチッと音がして、草がポーツと燃え上がりました。

「あついっ」

熱気が、人間の足もとを通りこして、後ろにいるマムーの顔に達しました。

草は赤い炎を上げ、そこから白い煙が、一すじに空へ立ちのぼっていきます。

「雲だ！」

マムーは叫びました。人間は火を使って空に雨雲を作ろうとしているにちがいありません。なるほど。このようなことは、動物にはとてもできない芸当です。

(人間はすごいや。)

と、マムーは感心しました。

やがて、草が燃えつき、火は消えました。でも、雨ふり山の真上に、雲はありません。

(へんだな?)

マムーの疑問をよそに、村人たちは、満足したように、山を下りていきました。

お家で、マムーは、朝見たできごとを、お母さんに話しました。

「人間たちが雨雲を作ろうとしていたよ。うまくいかなかったみたいだけど。」

「雨雲を作るのは、そう簡単ではないわね。人間は明日も来るわよ。」

「え、明日も？」

お母さんがいったとおりです。次の朝も、村人たちは、同じようにならなくなって、参道をのぼってきました。

「神さま、どうか雨をお降らせください。」

お宮にお参りすると、村人たちは、また山のとっぺんへのぼっていきま

す。ここまでは昨日と同じでした。マムーはまた先回りしながら、

(とっぺん広場ではどうかな?)
と考えました。

とっぺん広場のまん中には、火を燃やしたあとが残っています。しかし、まわりの草はなくなっていますから、昨日とまったく同じはずはありません。

村人たちがのぼってきました。

(さあ、どうするのかな?)

村人たちは、広場を取り囲むように並ぶと、今日は、まわりの斜面の枯れ草をカマで刈り始めました。マムーの目の前にも、草刈りガマの鋭い刃が、迫ってきました。

「おっと、こうしちゃいられないぞ。」

マムーは、さっと身をひるがえすと、後ろの木陰に回り、スルスルとこずえにのぼりました。枝先の葉っぱたちは、すっかりうなだれて、生気を失っています。

「きみたちは大変だね、ぼくたちみたいに動けないものね。でも、だいじょうぶ。人間がもうすぐ雨降らせてくれるからね。」

マムーは、近くの葉っぱに語りかけました。

マムーは、葉っぱたちの間から、てっぺん広場を見守ります。

村人たちは、刈った枯れ草を、広場のまん中につみあげると、まわりを囲みました。一人が枯れ草の山の下にかがんで、火をつけました。

枯れ草は、たちまちポーッと、炎に変わります。炎の先は、白い煙に変わって、風にゆらぐこともなく、まっすぐに立ちのぼっていきます。白い煙は、空に上って——雨雲に変わるはずです。

枯れ草の山は、燃えつきました。マムーは、目をこらして、じつと上空を仰ぎ見るのですが、雨ふり山の上にも、まわりにも、雲はありません。空は、みわたすかぎりまっ青で、お日さまの通り道をさえぎるものは、何もありません。昼間になれば、お日さまが真上にやってくるはずです。それにしても、本来の雲は、いったいどこへ行ってしまったのでしょうか。てっぺん広場のまん中に燃えあとだけを残して、村人たちは山を下って

いきました。

マムーは、まわりの葉っぱたちに、

「もう少しがまんしてね。」

と、声をかけてから、スルスルと木から下りて、お家へ帰りました。

「お母さん、今日こそ雨降るかな？」

「さあ、降るといいけど。どうかしら。」

お母さんの口ぶりは、疑問形です。

「だって、人間は雨降らせてくれるんでしょ？」

「そうよ、でも、一日二日ではむりね。」

「え？ ということは、明日もあさっても人間はやってくるの？」

「そうよ、明日もあさっても。もしかしたら、その次の日もね。」

ずいぶん気の長い話です。今朝であった木の葉っぱたちは、だいじょうぶなのでしょうか？

事実は、お母さんのいったとおりにになりました。村人たちは、次の日も、次の日も、そのまた次の日も、雨雲を作りにやってきましたが、雨の降る

気配は、いっこうに感じられません。

「お母さん。あんなことやって、ほんとうに雨降るの？」

ママーは、とうとう人間の行動に、うたがいをもちました。

「降るのよ。」

お母さんは、自信ありげに答えます。

「ほんとう？」

お母さんには、どうしてわかるのでしょうか。

「お母さんは、おばあちゃんから聞いたの。おばあちゃんのおばあちゃんのお、そのまたおばあちゃんが生まれる、そのずっと昔から、人間は、日照りが続くと、ああやってきたそうよ。来る日も、来る日も、熱心に雨乞いをするの。すると、雨は必ず降ったのよ。わかる？」

熱心に雨乞いを見ると、雨は必ず降る——なぜだろう。

ママーは、少し考えてから、

「わかった！」

と、叫びました。

ママーの頭の中で、雨乞いのなぞが、ついに解けました。

「雨が降るまで続けるってことでしょ？」

「そのとおり。」

お母さんが、にっこりうなずきました。

なるほど、降るまで続ければ、雨は必ず降るはずです。

おばあちゃんのおばあちゃんの、そのまたおばあちゃんが生まれる、そのずっと昔に、人間は、もうそのことを知っていたのです。

「お母さん、一番初めに雨乞いを考えた人って、頭いいね。きっと、その人が、雨ふり山って名前をつけたんだろうね。」

「あなたは、かしこいわ。」

お母さんはうれしそうに、ママーにほおずりしました。

村人たちは、毎日、お参りと雨乞いをくり返して、十一日目になりました。

前日までとは打って変わって、今までどこに隠れていたのかと思うくらい、いっばいの雲が空をおおっています。

「さあ、もう一息だ。」

村人たちは、枯れて落ちた木々の葉っぱを、てっぺん広場のまん中につきあげて、燃え上がらせました。

ママーは、いつもの木の上からそれを見ていましたが、昨日まで自分が語りかけていた葉っぱたちは、枯れ落ちて、今その炎の中にありました。

白い煙がまっすぐに立ちのぼっていきます。煙は、頭上の厚い雲に吸い込まれていくように見えました。

そのとき、マムーの顔に、ポツッと、しずくが落ちてきました。雨のしずくです。

「おお、雨だ。」

「雨が、降ってきたぞ。」

と、村人たちが、うれしそうに叫びました。

「神さま、ありがとうございます。」

村人たちは、口ぐちに神さまにお礼をいいながら、山を下っていきました。

てっぺん広場のまん中には、葉っぱの燃えかすが、雨にぬれて残っています。

マムーは、木の上で雨のシャワーを浴びながら、

「ありがとう、君たちのおかげかもしれないね。」

と、雨雲になった葉っぱたちにつぶやきました。

六 空を飛ぶ

マムーは、今日も空を飛ぶ方法を考えていました。

これまでの失敗を考えると、どうやら自分の力だけでは無理のようです。

「鳥だ！」

マムーの頭の中に、新しいアイデアがひらめきました。翼をもった鳥を利用することです。

「どうして今まで気がつかなかったんだろう。鳥を飲みこめばいいんだ。」
鳥を飲むなんて、いいところに気がついたぞ、とマムーは思いました。

パクッ。

気の早いマムーは、鳥を飲みこんだ自分の姿を、想像しました。胴のまん中が、ぷっくり丸くふくらんでいます。おなかの中の鳥が飛び立てば、あとは自分の体も大空へ向かって、スーイ。

(だが、待てよ。)

もし鳥が、ボクのおなかの中で、しっぽの方へ向かって飛び立ったらどうなる？ ボクは、逆さまに宙づりになって空を飛ばなければならないぞ。

ダメダメ。

考えただけでも、頭に血が上ります。

「二羽じゃダメだ、二羽でないと。」

すぐさま、マムーは、アイディアを改善します。そして、

パクッ、

と、いそいで頭の中で、もう一羽の鳥を飲みこみました。マムーの体は、ダンベルみたいに、頭としっぽがふくらみます。これなら水平飛行ができそうです。

(いや、待てよ。)

もし、おなかの中の二羽の鳥がやつぱりしっぽの方へ向かって飛び立つたら、どうなる？

ボクはしっぽを引っぱられるみたいに、後ろ向きに水平飛行しなければならぬぞ。

クラクラ。

考えただけでも、めまいがします。

まして——もし二羽の鳥が悪くて、前と後ろに別々に飛び立ったら、どうなる？

ボクの体は、前後にピーンと張って、鉄棒みたいに固くなっちゃうぞ。

イタタタッ。

考えただけでも、胴がひきつります。

「二羽でもダメか。」

三羽ならどうでしょう。マムーは、頭の中で三羽めの鳥を飲みこもうとしましたが、

ウツプ。

満腹感で、とても三羽は飲みこめません。

どうやら、鳥を飲みこむというアイディアは、あきらめざるをえません。

マムーは、次の手を考え始めました。

お日さまが西へ傾き、夕焼け色の空になってきました。

「そうだ！」

ママーの頭の中に、今度はもつといいアイディアが浮かびました。

雨ふり山の空が夕焼け色に染まり出すと、鳥たちは遊びをやめて、三羽、四羽と連れだって、家路につきます。

そんな中で、ゆうゆうと空を舞っているのは、トンビです。一日をめいっばいに楽しみながら生きているトンビにとって、夕日を浴びるのは、一日を終える前の最後の楽しみです。

ピーヒョロヒョロ

と、口笛を吹きながら、気流に乗って、雨ふり山の上にさしかかったトンビの風太郎も、ねぐらへ帰る前に、この山の上に輪を四つ五つ描いていこうかな、と考えました。

ただ丸く飛ぼうというわけではありません。輪を描きながら、一筆書きで巨大な絵を描くのが、風太郎の特技です。輪を四つ描けば「四つ葉」、五つ描けば「梅の花」になります。

風太郎は、これから描こうとする巨大な図形をイメージしながら、スタート地点を、雨ふり山のとっぺんに決めました。

「よし、行くぞ。」

風太郎は、体の力をフツと抜いて、上空からとっぺん広場めがけて接近飛行を始めました。

（おや？）

その時、風太郎の鋭い目は、とっぺん広場の草の上に置かれた、こげ茶色の小さな丸い輪をとらえました。

「何だろう？」

自然のものではありません。

一筆書きをやめて、風太郎は、そのままとっぺん広場に舞いおりました。

鮮やかな小判もよう入りの、美しいリングです。

（ハハア、首飾りってやつだな、これは。）

にわかに、風太郎に、おしゃれ心が生じました。ためしに、草の下から、ひよいとリングに首を通すと、なんとサイズはぴったりです。

風太郎は、ニンマリしました。

「こいつは、いい拾いものだぞ。みんなに自慢してやれ。」

たった一つの首飾りで、風太郎は、すっかりスターの気分です。

「では！」

風太郎は、大きく羽ばたいて、雨ふり山のとっぺんから、一気に夕焼け

空に向かって舞い上がりました。

眼下が開け、巨大な夕日が目の高さにあります。

(これはすごいや。)

思わず心の中でそう叫んだのは、マムーです。マムーはついに空を飛んだのです。そう——首飾りに化けて、です。

頭としっぽをからませて輪になり、風太郎の首のまわりに収まったマムーは、燃えるような夕日に、真正面から向き合っていました。

(これが、空を飛ぶってことなんだ。)

マムーは、眼前に広がる夕焼けの中に、自分が吸い込まれていくような錯覚をおぼえました。

ふいに、景色が左へ大きく傾きました。風太郎が、右に旋回を始めたのです。地上の景色が、右方向からグングン手前へ回り込んできます。

前方に、小山が現れました。丸くふっくら盛り上がった、かわいい山――

(あれが……)

マムーが初めて見る、雨ふり山の全景です。

てっぺんめがけて、風太郎が、急降下を始めました。スーッと、魂が上に抜けるような落下感です。

てっぺん広場のすぐ真上で、風太郎は、また右旋回して上昇に転じました。雨ふり山が、弧を描いて後ろへ離れていきます。

マムーにはわかりませんが、風太郎は、予定を変えて、とっておきの得意芸「八重桜」の一筆書きをひろうしているのです。

急ターン、宙返りといった技をおりこみながら、八重桜の花びらの立体図形を、風太郎は、自分のイメージどおりに、正確に空中にデザインしていきます。

風を切るスピード、流れるように移り変わる地上のパノラマ、いきなり天地がひっくり返るスリル——幸運にも、風太郎の得意芸には、空を飛ぶ魅力のすべてが含まれていました。マムーは、ハラハラしながらも、楽しくて仕方ありません。

やがて、風太郎は、芸術的な一筆書きを、雨ふり山のとっぺん広場の上空で、ピタリと決めました。

「どうだい、風太郎さまの芸は。」

きつと、まわりのだれもが、自分の曲芸飛行に注目したはずです。そして、この首飾りをうらやんだに、ちがいません。

ピーヒョロヒョロ

と、風太郎は、得意げに口笛をならしました。

夕焼け色がいちだんと濃くなっています。

「さて、お日さまが沈む前に、ねぐらへ帰るとするか。」

風太郎は、雨ふり山の上空から、南の平地の方へ飛行を始めました。

このときになって、マムーは、自分が地上にもどる方法を考えていなかったことに、気づきました。

(しまった。)

このまま風太郎のねぐらへ連れていかれたら、大変です。

後ろを見やると、てっぺん広場が遠のいていきます。何とか、風太郎を、引き返さなければなりません。

南の斜面には、わが家も同然の小さなお宮が、沈みかけた夕日を浴びています。

それを見て、とっさにマムーはいい手を思いつきました。急がなければなりません。

「これ、風太郎。」

「だ、だれだ、おいらの名前を呼ぶのは？」

「……」

返事がありません。

「変だな。だれかが、おいらの名前を呼んだような気がしたんだが……」

「わしは、雨ふり山の神さまじゃ。わしをあのお宮へ連れもどしておくれ。」

「え？」

様子がのみこめない風太郎は、そのまま飛び続けようとしていましたが、急に、首にかけた首飾りがちぢみしました。

「く、苦しい。」

「雨ふり山のお宮にもどるのじゃ。」

「は、はい。」

風太郎は急ターンして、雨ふり山に向き合いました。すると、首飾りがゆるんで、首が楽になりました。

(首飾りが神さまなんて……夢かな?)

まだ信じられない風太郎は、もう一度ねぐらの方に向かおうと、ターンして、雨ふり山に背を向けました。

とたんに、また首飾りがちぢみしました。

「わ、わかりました。」

風太郎は、あわてて向きを変え、まっしぐらにお宮をめざします。

お宮の屋根の上に舞いおりた風太郎は、うやうやしく首を下げ、首飾り

を屋根板の上に置きました。

「風太郎よ、おまえの芸は世界一じゃ。これからも励めよ。」

「はい、ありがとうございます、神さま。」

風太郎は、感激に翼をふるわせて、舞いました。

クネクネ

と、神さまの首飾りから元の姿にもどったマムーは、

フー

と、大きく息をはいて緊張をとくと、

「もしかしてボクの芸も世界一かな。」

と、つぶやいて、ウフと笑いました。

ピーヒョロヒョロ

ピーヒョロヒョロ

南の空に、風太郎の口笛がひびいています。

「ありがとうございます、風太郎。」

マムーは、遠ざかる風太郎の後ろ姿を、いつまでも見送りました。